

虹の海の童話集

キングのいる海

ぶん・え プアマリナ 1999年5月

ぼくたちイルカが暮らす海には、キングという名のシャチがいた。
頭に王様のかんむりの様な傷があるからそう呼ばれている。

なんでも昔、サメとたたかっただけでできた傷らしい。

キングはその名の通りシャチの王様だ。仲間の中では一番大きいし、泳ぐのもすごく早い。

それにあばれんぼうのサメだっていじわるなゴンドウクジラだって、キングを見ただけですごいスピードで逃げて行っちゃうんだ。

お父さんやお母さん、それに他の大人のイルカたちはキングのグループをすごく恐がって悪口ばかり言っているけど、ぼくたち子供のイルカの間では、彼はちよつとしたヒーローだった。

ある日、ぼくたちが入り江で魚を追っかけて遊んでいると、突然シャチのむれに出くわした。危ないから入っちゃだめだとお母さんに言われていた場所だった。みんなあわてて逃げただけで、ぼくだけ逃げおくれたしまった。キングにギョロツとにらまれたぼくは体がすくんでおしっこをちびりそうになった。

「おいぼうず、さっさと逃げないとおれ様が喰っちゃまうぞ。」

そんなこと言われても動けないんだ。

「なんだぼうず、おれ様が恐いのか。」

キングが近づいてきた。頭の王様のかんむりがはつきりとぼくには見える。サメの歯形の二つ一つまで。

だめだ。もう食べられちゃうと思った時、シャチの王様はニヤリと笑った。

「お前みたいになっちゃいやつを食べても腹の足しにもなりやしねえ。」

そして仲間に合図して入り江から出ていってしまったんだ。

ぼくはあとでお母さんに大目玉をく



らったけど、でもキングがますます大好きになっただ。

そんなぼくたちの住む海に事件がおこった。キングが一人でどこかへ出かけてしまった時のことだ。

キングがいなくなつて大人たちは喜んだ。

「これでやっと平和にくらせる。」

でも大人たちの言う平和は続かなかつた。

西の方から大きな大きなマッコウクジラが三頭もやってきて、いじわるを始めたんだ。

しつぱに飛ばされて大けがをしたのもいるし、追いかけて回されて泣き叫ぶのもいる。

何より困つたのは餌の魚がみんな逃げていつてしまったことだ。さすがのシャチたちもマッコウクジラにはかなわない。みんなこの海から出ていつてしまった。「シャチなんていざという時まつたく役に立たない。」

大人たちがまたシャチの悪口を言い合っているから腹が立つたけど、今はそれどころではない。しかたがないからみんなで住みなれたここを出ていくことになつたんだ。

その時、ぼくたちイルカが出ていこうとした岬の方から、一頭のシャチがすごいスピードでクジラたちに向かつていくのが見えた。

キングがもどつてきたんだ。シャチの王様はいらだつた様にグルグル回りながら叫んだ。

「お前ら、おれ様の海から今すぐ出ていけ。」

クジラたちは相手がたつた一頭なのを見て鼻で笑つた。

「お前一人でおれたちとたたかつつもりか。」

言い終わらないうちに、キングが先頭のクジラに飛びかかつた。

ものすごい波が立ち、水しぶきがばしゃばしゃと上がる。いかにキングとはいへ三頭ものマッコウクジラ相手では勝つてこない。

それでもボロボロになりながらもたたかい続けている。

王様のほこりを決して失つていない。

「がんばれキング。」思わずぼくが叫ぶと、キングはこっちをちらつと見た様な気がした。

さすがに大人たちからも声が上がつた。



「いいぞキング。がんばれ。」
やがてそのがんばりに勇気づけられた仲間なかまのシャチたちがもどってきた。それを見たクジラたちは海の底深くもぐってしまった。そのままどこかへ出ていってしまった。キングが勝ったんだ。その事件じしけんからしばらくして、ぼくはまたあの入り江でキングに出会った。あの時の傷きずはほとんど治なおっていたけど、王様のかんむりが二つに増ふえている。

「おいぼうず、おれ様の体がこんなじゃなかったら、喰くっちまうところだぞ。」

そう言ってシャチの王様はニヤリと笑った。

大人のイルカたちはあの時のことをすっかり忘れて、またシャチの悪口わるぐちを言い合っているけど、みんな知っているんだ。

キングがいるからこの海で生きていけるんだって。

お話の背景

「父兄の方に知っておいてほしいこと」

シャチはクジラの仲間です。
集団でもっと大きなクジラを襲ったりすることからキラールホエールなどという不名誉な呼ばれ方もしますが、本当はとても頭がよくて、家族愛にあふれた生き物のようです。

また、オキゴンドウクジラというこちらもクジラの仲間ですが、かなり気性の激しい種類がいて、歯形が非常にシャチに似ているところから、主にクジラを襲っているのはこちらではないかということも最近では言われているようです。クジラには普通の歯があるハクジラと、クシのような長い歯で小さな魚やオキアミなどを濾し取って食べるヒゲクジラとがあります。
セミクジラや有名なシロナガスクジラは、ヒゲクジラの方に入り、イルカやシャチなどはハクジラに入ります。

文中に出てくるマッコウクジラは、このハクジラの仲間の中で最大になる種類で、世界中の海を股(つ)ってどこ?)にかけて泳ぎ回っています。

マッコウクジラの巨大な頭には脳油というものがつまっていて、ここに血液を循環させて体温を調節することにより脳油を液体にしたり固体にしたりしています。これは主に深海の巨大なイカ(ダイオウイカ)を食料とする彼らの食性のため、脳油を固体にして深海まで一気にめぐり、浮かび上がるときは脳油を液体にします。固体と液体の比重のお話をご存知ですね。

文中では悪役に扮してもらったマッコウ君ですが、非常に興味深いクジラだと思います。

虹の海の童話集

キングのいる海

ご意見は、Web版「虹の海の童話集」
<http://www.mars.dti.ne.jp/gec/fairy>
またはE-Mail
gec@mars.dti.ne.jp
まで